



『リズム』という絵本

真砂 秀朗

「赤ちゃんのための絵本を作ってほしい」という企画をいただいて、この仕事に取りかかったのは、もうずいぶん前のことです。

そのときにまず思い出したのは、自分が親になったころ、本当に子どもに与えたいと感じる絵本が無かったという、僕としては切実な経験なのでした。

本屋さんに行って探してみても、そこに描かれているのは乗り物やアイスクリームや、人工の物がほとんどです。また動物などの描き方にしても、アメリカンアートのように何か温かみがあってシンプルな表現のほうが、赤ちゃんは喜ぶのではないかなあ

と感じてしまうのです。

そして、生まれてきて初めて体験する世界で、いきなり近代的なものや具体的なことよりも、もっと自然で抽象的で優しい感覚を、お母さんと一緒に感じられるような絵本はないかなあという思いをいだけていたのです。

当時アーティストとして駆け出しの僕は、表現の基礎を創るうえで、自分としては何か限界のようなものを感じていた近代的な文明のオルタナティブとして「ネイティブ文化」にとっても惹かれていました。

そしてまだ文明の波が押し寄せていなかったアジ

アやアフリカの地を旅しては、ネイティブな音楽やアートに接することがとても楽しかったのです。

何よりもその地での、自然に属している時間や空間、そしてその中で生活を体験することで、文明の中で育った自分の感覚をもう一度洗い直すことができたでしょう。

そんな旅の思い出を少しお話ししましょう。

バリ島は、生命の気に満ちている所です。

少し山の方へ行くと、見事な棚田が連なっています。火口湖からの水路を各村々に張り巡らせ、これだけたくさんの田んぼができている、まさに人と自然の折り合った風景です。そしてその折り合った姿こそ、美しさを感じさせてくれます。

初めてのこの島への旅は、まだお乳を飲んでいたら赤ん坊の息子と妻の三人での滞在でした。竹で建てられた民宿では、いつもおばさんやお姉ちゃんが息

子をだっこしたり、バナナをすりつぶした離乳食を食べさせたりして、とても大切にしてくれます。

赤ちゃんと一緒に行ったおかげで、村の人々が赤ちゃんを神聖な存在として対応している感性に触れることができたし、自分たちも赤ちゃんの視点で自然の中の生活の一コマ一コマを感じることができるようになっています。

風のざわめき、椰子の葉のきしみ、鳥たちのさえずり、いろいろな音が一つになって聞こえています。その中に、カラコロカラコロと音階になった音も混じっています。よく見ると田んぼの中に竹で作った風車が立っていて、風が吹くと、音が出る仕組みになっています。鳥を追うためにお百姓さんが作ったものですが、風を楽しむアートのようにも見えます。

テラスに置いてあった竹の木琴は、ドレミソラの世界共通の五音階で、乾いた竹の丸い響きがとても

気に入ってしまいました。

「この楽器はティンクレックと言って、私が若いころは男の子はみんなこの曲を練習して、女の子を誘ったものだよ」と言いながら民宿の主人が教えてくれた曲を練習するのが、僕には日課のようになっていました。

うっすらと日が暮れてくると、どこからかガムラン音楽が聞こえてきます。音をたどって行くと、村の集会場では、昼間田んぼをしていた男たちがガムランユニットを組んで練習をしています。子どもたちも周りで見たりまねをしたりしています。こんなふうにして演奏を覚えていくのでしょうか。

ここでは人と自然の境界線がはっきりと固定しているのではなく、連なり合ってゆったりと揺れているようなのです。自然の音の中にリズムやメロディーが聞こえ、音楽の中に自然の気が満ちているようです。

西アフリカはリズムの宝庫です。

中でもジャンベというタイコは、三種類のたたき方で三つの音階を出します。まるでイントネーションを含んだ言葉のようでもあるのです。ですからリズムパターンを伝えるときも音符ではなくて、

グンゴドツパ　グゴドバ

グンゴドツパ　グゴドバ

とか、

ゴド　パッティバ

ゴド　パッティバ





という具合に口で伝えるのです。リズムといっても最初から唄と一緒にあるのです。

でも本当にアフリカのリズムに出合ったのは、後になって西アフリカを旅したときに滞在した街で、タイコを習ったときのことです。

毎日、公園の決まった場所に座っている先生の所へ通って、先生が伝えてくれるのと同じリズムパターンをできるようにするまで、口と手をまねながら繰り返し繰り返し練習します。それができるようになると、違うリズムパターンを覚えてくれるのです。そんなことをしているうちに、ふと思いました。

あや取りのようだなあ、これは……手を覚えて相手と遊びながら、どんどん高度なパターンになってゆく。

織物のようでもあるなあ……幾つものパターンが重なり合って、一つの模様が浮かび上がってくる。その模様には名前が付いているのです。そして伝統的なリズムには、目的や効能があります。農耕の祭りのリズム、癒しのリズム、植物を育てるリズム、儀式のリズム、というように。

「リズム」という言葉を音楽用語と思っていた僕にとって、アフリカのリズムは、うれしいときや悲し



いとき、また聖なるときに、体と自然をつなげてくれる道具なのだということを、教えてくれました。

文明は、長い時の流れの中で土から栄養をもらって育つ大樹のように、自然という基盤の上に形創られてきました。自然が豊かでなかったら、文明も存続できません。

人も同じだと思うのです。お母さんのお腹の中で長い長い進化をし、産まれたときはまだ自然に属しています。歩くようになって社会と接し始め、自我に目覚めて文明に参加していくのでしょうか。

数々のネイティブブランドを訪れた旅から、そんなことを僕は感じていました。

さてさて、そういう訳で、赤ちゃんのための絵本を作るうえで大切にされたことは、まず「赤ちゃんにとっては自然そのものであるお母さんとのコミュニケーションが、無理なく楽しくできるということ」、そして「表現する形は自然の中にあるモチーフをできるだけ優しくシンプルにすること」です。

そして自然の中の生活をテーマにした七冊の絵本ができあがりました。

『ひかり』『ながれ』『かたち』『ことば』『いのち』

『きもち』『リズム』（三起商行）。七冊並べると虹の七色になるので、「レインボウブックス」というシリーズです。このうち五冊には言葉が小さい付いてありません。それぞれのテーマが絵だけのストーリー

リーになっています。お母さんが自分の言葉で、赤ちゃんに語りかけてほしいからです。きっといろいろな物語が生まれるでしょう。

『ことば』はヒラヒラとかユラユラという擬態語と絵で構成しました。擬態語は自然領域に最も近い、いわば赤ちゃんに近い言葉だと思うからです。

そして『リズム』は、アフリカの旅の所でお話した、口で伝える西アフリカのリズムパターンと、それに対応した農作業や踊りの動作を明るくシンブルに描いたものです。

言葉というより、お母さんの音声がアフリカの四拍子や六拍子のリズムになって赤ちゃんに伝わるのです。

読者のアンケートによると、うれしいことにこの『リズム』は赤ちゃんにとっても人気があるようです。

この絵本はブックスタートという、生まれてきた

子どもに最初に与える本の大切さを考えるNPOの推薦図書になったこともあって、ずっと版を重ねてきました。

今改めて奥付を見ると一九九〇年初版とありますから、もう十八年も経っています。当時この絵本を見ていた赤ちゃんたちが、もうそろそろ成人を迎えるのですね。

(アーティスト・ミュージシャン)



▲イラスト：真砂秀朗『リズム』より